



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

四旬節第2主日 A年(2026年3月1日)

主任司祭 小西広志神父

第一朗読：創世記 12章1—4a節

第二朗読：テモテへの手紙二 1章8b—10節

福音朗読：マタイによる福音書 17章1—9節

変容

四旬節第二主日は毎年、主のご変容の箇所が読まれます。受難に先だって、主イエス・キリストはご自分が誰であるのか、ご自分の本当のお姿を弟子たちに教えます。それは、十字架で弟子たちが迷ってしまわないようにとの配慮からだったのではないのでしょうか。

今日の福音朗読の直前で、イエスさまは「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」(16章15節)と弟子たちに問いかけ、ペトロは「あなたはメシア、生ける神の子です」(16節)と答えました。その後にイエスさまは一回目の受難の予告(21-28節)をなさってから、六日後の高い山での出来事が今日の朗読箇所となります。イエスさまは、ご自分が神から愛された神の子であることを弟子たちに伝えようとしたのです。

5節の「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」をここに留めましよう。

イエスさまがヨルダン川で洗礼を受けたときに天から聞こえてきた声と同じものです(マタ3章17節参照)。「愛する子」の背景にあるのは『イザヤ書』の主の僕の姿です。

見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。

わたしが選び、喜び迎える者を。

彼の上にわたしの霊は置かれ

彼は国々の裁きを導き出す(イザ42章1節)。

洗礼の時から神から愛された神の子、神の僕として歩み始めたイエスさまは、山上で姿を変えることを通じて、さらに愛された子としての自覚を深めます。そして愛された子、神の僕としての生きる道は受難の道でした。「これに聞け」はヨルダン川の洗礼の際の声にはありませんでした。仮小屋を造りましょうというペトロの提案の答えは、「聞け」となります。

さらに7節の「イエスは近づき……」は興味深い表現です。というのも、『マタイによる福音書』では、多くの場合には人がイエスに畏敬の念を抱いて「近づく」とあります。しかし、ここではイエスさまご自身が「近づき」ます。これ以外に、イエスさまが近づくのは次の箇所があります。「イエスは近寄って来て言われた。『わたしは天と地の一切の権能を授かっている』」（28章18節）。

今日の福音にある変容の場面では、イエスさまは「起きなさい。恐れることはない」（17章7節）と弟子たちを力づけ、励まし、「今見たことはだれにも話してはならない」（9節）と命じます。弟子たちが復活したイエスさまと出会う場面では「父と子と聖霊の名によって洗礼を授け……わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（28章19-20節）と約束します。

こうしてみると、今日の朗読にある17章7節の箇所はイエスさまの復活の場面と類似しています。高い山でイエスの変容に直面した三人の弟子たちは山を下りて、イエスさまと一緒に神の国の福音を宣べ伝えます（宣教）。同じように高い山で復活したイエスさまと出会った弟子たちは山を下りて日常生活の中でイエスさまの出来事を宣べ伝える（宣教）のです。

【あじわいのポイント】

ところで、ペトロはどうして仮小屋を建てることを提案したのでしょうか。日常の世界を超えた永遠の世界に触れたペトロは、それを自分の手元に留めたいと願ったのでしょうか。それは「自分のもの」にしたかったからです。

しかし、第二朗読にあるように「神がわたしたちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださいました」（2テモ1章9節）と考えるパウロは、自分は神から「呼び出された」と理解しているようです。

第一朗読でのアブラムも同様でしょう。「わたしが示す地に行きなさい」（創12章1節）と呼びかけられて、「主の言葉に従って旅立った」（12章4a節）からです。このような生き方になるためには「これに聞け」という呼びかけが必要となります。